



初恋 はつこい オレンジタルト
Hatsukoi Orange tart

あまさわ なつき
天沢夏月 / 著
たかがみ ゆりこ
高上優里子 / イラスト

Hatsukoi Orange tart

— 目次 —

1. オレンジ・タルト

P005

2. チョコレート・フィナンシェ

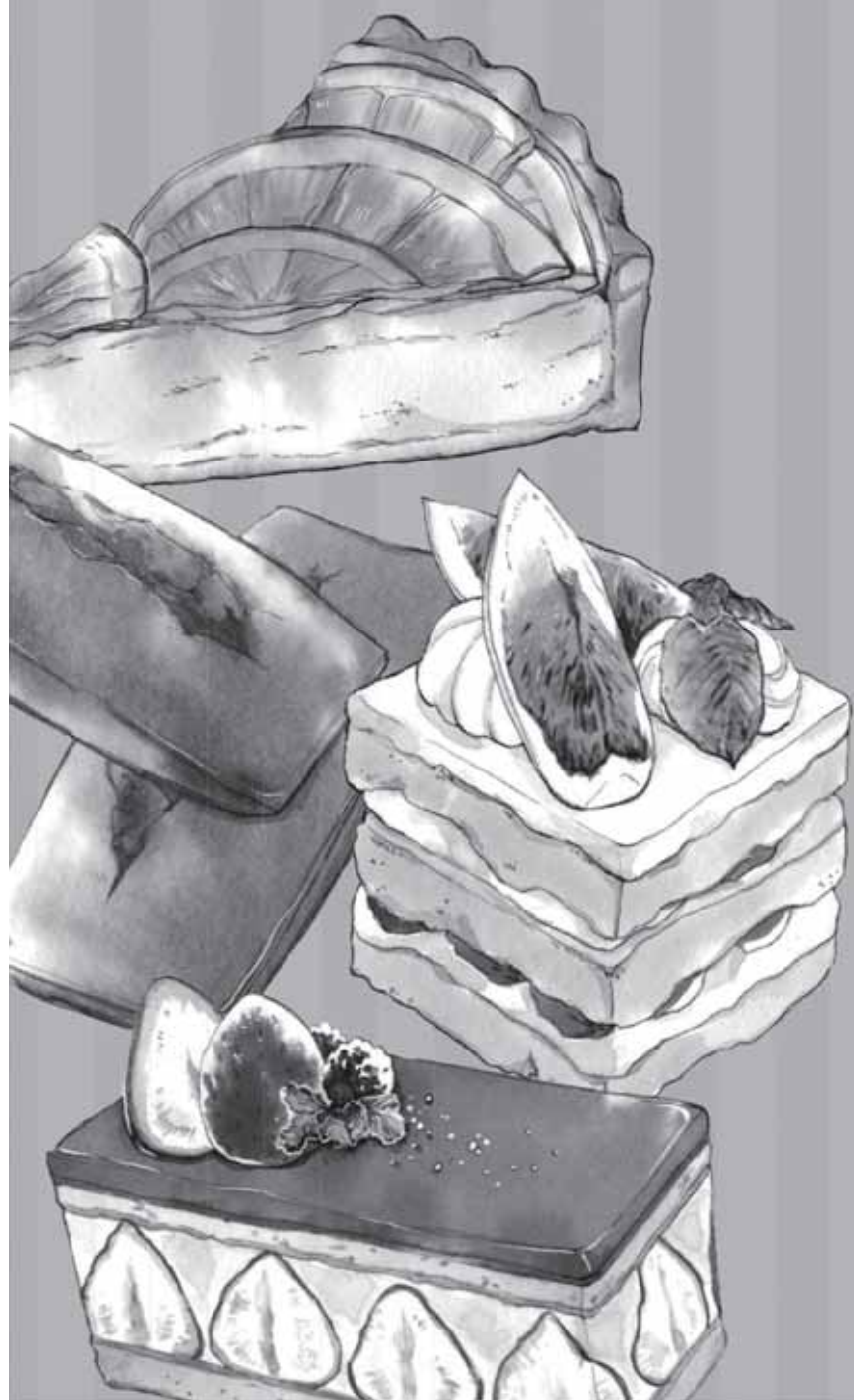
P051

3. ^{いちじく}無花果のショートケーキ

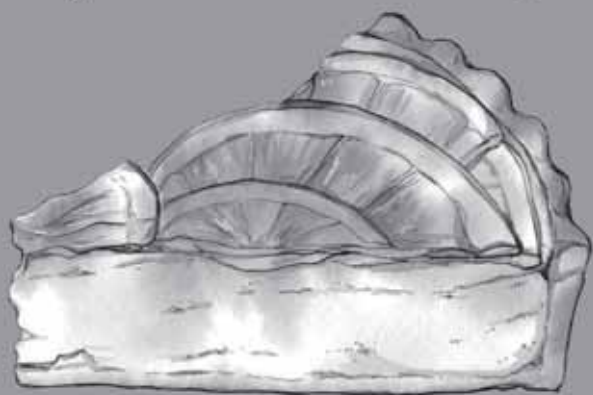
P121

4. ^{はる}春のフレジェ

P183



Hatsukoi Orange tart



1

— Orange tart —

オレンジ・タルト

中学生になった。

だからと言って自分が特別大きくなったわけでも、大人になったわけでもないし、世間的に見ればまだまだ子ども。新品の制服はちよつと窮屈で、慣れないにおいがして、大人になろうとする私を無理矢理子どもの殻に閉じこめておこうとしている。

小学生の頃見かけていた中学生は、もつとずっと大人で、怖く見えた。兵隊みたいにお揃いの制服を身にまとい、先の尖ったローファーでずんずん歩き、ちつぽけな私たちなんか眼中にもないみたいに大きな声でしゃべる。小学生にとつての中学生は、親なんかよりもよつぽど“年上”を感じる存在だった。地元の中学生と道ですれ違うたびに、私たちは身を縮めて視線を落とし、ヒンシュクを買わないように彼らをやり過ぎさなければならぬ。

けれどそんな私も中学生になると、今度は不思議と中学生が子どもに見えてくる。

中学生、なんて言ってもついこの間まで小学生だったのだ。中学一年生なんて言うより、小学七年生って言った方がしっくりくる。制服なんか着て気取っちゃってるけど中身はまだまだ子どもで、馬鹿っぽくて、特に男子なんか、どうしようもなくガキ。

ホント馬鹿なんだ。掃除の時間なのに、同じ班の男子がさつきからハウキ片手にチャンバラごっこに忙しくて、まるで役に立たないの。彼らの足下を桜の花びらがころころと転がっていく、

ほら、それだよ。その花びら。掃除してよ。校内に入っちゃうじやない。

でも昇降口の掃除なんて先生の目も行き届かないから、みんな適当にしかやらないのは仕方ないことかもしれない。

きちんとホウキを動かしている私と陽菜だつて、そんなにたくさんのごみを集められているわけじゃなく、ちりとりにはちんまりとしたほこりしか溜まっていけない。別にいいんだ。どうせ昇降口なんてすぐに汚れるんだから。そんなこと言ったら、暴れている男子を責めることもできなくなってしまうけど。

「教室の後ろの方にさあ」

突然陽菜がのんびりした口調で言い出した。

「背のたっかい男の子いるじゃん？」



「わかんないよ。どの列？」

「ろう下側から二番目の列」

言われて私は、その列に座っている男子を思い浮かべた。四月に入学したばかりでまだ名前も覚えていないやつばかりだ。でも、背の高い、むすつとした顔の男子が、確かに一人いる。

「ああ、いるね。それがどうかしたの」

「たまに美夏の方見てるよ」

陽菜はぼんやりとした顔をふにやりとさせて笑った。同じ小学校で、クラスも同じだったから、私は陽菜の顔を見慣れている。このふにやふにや笑いはからかっているときの顔だ。

「見てる？」

出席番号一番の私の席は一番前なので、ほとんどの生徒の視野には入っているだろうけど、
「見ている」と言うからにはそれだけじゃないだろう。

「私、席となりだからよく見えるの。美夏の背中ときどき見てる」

「気のせいじゃないの。顔がちよつと右向いてるだけでしょ」

「いやいや、ガン見なんだよ。なんかすごい難しい顔して見てるのよ。私気になっちゃってさ

あ

「そんなに見られてたら視線感じそうだけどな」

配られたプリントを後ろに渡すために振り向くとき、目が合ったような記憶もない。少し日に焼けた、真面目そうな男の子だったように思う。

「気があるんじゃないの」

「ええー、しゃべったこともないよ」

「ヒトメボレよヒトメボレ」

「残念ながらそんなんされるほど美人じゃございません」

私はいーつと舌を出す。どちらかと言えば陽菜の方がモテるはずだ。それに、クラスにはもつとかわいい女の子がたくさんいる。

私たちは昇降口の端から端まででるようにホウキを動かし、ちんまりと溜まった小さな埃の山をてっぺんを尖らせるようにして中央に寄せる。男子はまだチャンバラの真っ最中だ。部活に向かう生徒たちが時折昇降口を通り抜けていく。上級生らしき男女がやけにくつついて出ていて、私と陽菜はなんとなくその背中を見送った。

「……カップルかな？」

「……っぼかったね」

「三年生？」

「かなあ。上履きの色見た？」

「ううん」

「むう……」

陽菜は遠ざかっていく二人の背中をじろじろと見ている。

「はー、私も恋がしたい」

そのまま突然ぼそつとつぶやいたので、私は噴きだした。

「なに、それ」

「なんとなく。春だから」

「なんかドラマの台詞みたい」

「わかる、ちよつと昼ドラ入ってたよね」

私たちは顔を見合わせてけたけた笑う。

クラスには男の子と、付き合ってる女の子がいるらしいけれど、私も陽菜もそういう方面はまるつきりだめだ。でも私よりは陽菜の方が近いと思う。陽菜にはずっと憧れている初恋のお兄さんがいるらしい。そういう意味じゃ陽菜、ちゃんと恋してるんだ。

私の初恋は……いつだろう。そもそも恋したことあるんだろうか。

男の子には興味がない。馬鹿だし、うるさいし、掃除はしないし。バレンタインだって、チョコをあげるのはいつもお父さんだけだ。でも世間的には女の人は男の人を好きになるものらしい。どうして女の子は男の子を好きになるんだろう。私もいつかは恋をするのかな？

「ねえ、今日陸上部の練習見学いかない？」

掃除の後でホウキを片付けているとき、陽菜が言った。

「うーん。ごめん、今日はだめ」

私の家はお菓子屋さんで、お店の手伝いをしなければならぬことがある。今日もそれだ。でも陽菜が小学校でもやっていた陸上部に入るといふなら、私も入りたいとは思ってる。あんまり速くはないけど、走るのは好きだ。

「そっか。わかった。じゃあまた今度だね」

「うん」

私たちは一度教室に戻って、真新しい鞆を肩にかけ、それから少しだけ教室の窓からグラウンドを眺めた。部活が始まっている。今日は野球部が校庭を使える日みただけで、陸上部は外周を走ったり、砂場で走り幅跳びをしたり、マットを出して走り高跳びをしたりするので、その準

備をしている。緑色のマットを重たそうに運んでいる先輩たちを見ると、少し気持ちが悪うずうずした。

「走り高跳び、やりたいな」

私がつぶやくと、陽菜が首をかしげた。

「得意だっけ？」

「いや、全然。でも、やりたいなあつて。跳びたい。走り幅跳びでもいい。なんか思いつきり、

跳びたい。走りたい」

「春だねえ」

しみじみ言った陽菜が、なにかに気がついたように急に声をひそめた。

「……美夏、静かに」

「え、なに？」

「なにも言わずに『せーの』で振り向いて」

陽菜は奇妙なことを言った。せーので振り向く？ 後ろになんかあるの？

ついつい振り向きそうになる私の頭を陽菜がぐいっと手で押さえた。

「せーので振り向くの。勢いよくね。一瞬でばつとね。教室の前の方見てね」

「なに？ なんなの？」

「いいから。いくよ……せーのっ」

ぱっ。

振り向いた先に一人の男子生徒が立っていて、

ぱっちり目が合った。

高い背丈。少し日に焼けた肌。短い髪の毛

と、眉毛が山なりに釣り上がっているのとは反

対にちよつと眠そうな垂れ目。野球部っぽい顔

つきだけどそうじゃないことだけは知っている。

る。

あいつだ。

陽菜が言っていた。ろう下側から二番目の列

に座っている、背高のつぼのむつすり男子。

目が合っていたのは一瞬だった。背高のつぼ

はふいと目をそらして、自分の席から荷物を取

ると、すぐに教室を出ていった。陽菜がしたり



顔で「ね？」と言った。

「美夏のこと、見てたでしょ？」

確かに今のは見られていたな、と思った。

誰だろう、あいつ。

同じ小学校じゃないことだけは確かだ。

名前は北岡雅也。なんだか聞いたことのあるような名前だけど、顔に見覚えはない。教室ではあまりしゃべったりもしないみたいだし、無口でむすつとしていて、いつもなにかに怒っているみたいに見える。

あんなふうに見られていたことを知ってしまったら、気になって気になってしょうがなくなつた。いったいなんなのさ。私になんの恨みがあるわけ？ いや、恨みかどうかは知らないけどさ。でもなにか理由があるわけでしょう？

プリントを配るとき、ついついそつちに視線を向けそうになる。前に向き直つてからも、後頭部のあたりにちくちくとした視線を感じる気がする。ポニーテールにした髪の毛の、ちょうどその付け根あたり。今も見られているかもしれない、と思うと、頭の中で陽菜の声がする。

——せーのつ。

振り向きそうになるのを必死にこらえる。だってこれで振り向いて目が合いてもしたら、なんだか決定的じゃない。嫌だよ、よく知りもしない男子と何度も目が合うなんて。でも目が合いさえしなければ、私はちらちら北岡を観察するようになっていた。

中学生の男子なんてまだまだお子ちゃま——そう思っていたけど、北岡は他の男子とは違っている。騒がないし、はしやがない。先生に対しては礼儀正しく、授業中もはきはきとした声で受け答える。見たことはないけど、たぶん手の挙げ方もきっちりしてるんだろうな。ぴしっと床に対して垂直。指の先までまっすぐ伸びていそうな、お手本みたいな挙手。

北岡はバスケット部だ。仮入部期間だけど、すでに本入部を決めているらしい。背が高いから、きつと活躍できるんだろうな。でもあんまり素早く動いているところは想像がつかない。北岡の動きはのっそり、もつさりとしていて、なんとというか岩が動いているみたいだと思う。

私と陽菜の間で、岩男というあだ名が密かについた頃、席替えがあった。私は後ろの方の席になり、陽菜が少し遠くなった。北岡は、というと、なんと私の目の前になった。

改めて目の当たりにすると、どでかい背中。っていうか前が見えない。本当にそこに一枚の岩があるみたいだ。

家の手伝いが無い日に陸上部の練習を見学した。すでに何回か顔を出している陽菜は親しげな様子で先輩と話していて、一人置いてけぼりの私はちよつと居心地が悪い。いつも陽菜といのが当たり前なので、陽菜を取られると勝手に人見知りになつてしまう。陽菜はあまり人見知りをせず誰とでも仲良くできるタイプなので、こういうところでは差がついてしまう。

着慣れないジャージのジッパーを上げたり下げたりしていると、横から声をかけられた。

「天海じゃん」

声の方を向くと、見つけた顔がそこにあつた。小学校も一緒のクラスだった、土居健二。お調子者で馬鹿な男子でいつもは苦手だけど、今はしゃべる相手がいてほつとする。

「土居も陸上部なの？」

小学生の頃、同じクラブだった覚えはない。

「中学からは運動部に入ろうと思つて」

土居はそんなことを言いながら、ひよろくて青つちろい足を屈伸させる。足が速かつた記憶はとくにない。こいつ、どんなふう走るんだらうな。

「天海も陸上続けるんだな」

「私、仮入部だけどね」

「なんか意外だわ」

「なにが？」

「いや、天海ってあんまり運動得意そうに見えないし」

「まあ、足はあんまり速くないけどね」

「つていうか、天海って世話焼きなイメージ。マネージャーっぽい」

中学の部活にマネージャーなんているんだろうか。私に向いてそうつて、土居が言うとなんたかあまり褒め言葉には聞こえない。

「バスケット部のマネージャーとかやればいいじゃん」

そんなことを言われて、私はきよんとした。

「なんでバスケット部なの？」

「北岡がいるから」

土居は人をおちよくるときに見せるにやにや笑いを浮かべて言った。意味はよくわからなかったが、なんとなくタイムリーな北岡の名前を出されてどきりとする。

「北岡とマネージャーとどう関係があるのさ」

「あれ、天海覚えてないの。君らとつても仲良かったじゃないのさ」

私は口を間抜けに開けて、まじまじと土居を見てしまう。

「なんの話？」

「幼稚園の話。あれ、もしかして俺が幼稚園一緒だったことも忘れられてる流れ？」

私はもはや土居の話聞いていなかった。

幼稚園。

脳裏にひらめくものがあつた。

背の低い、あどけない顔で笑う、小柄な男の子の後姿。

砂場でよく一緒に遊んだ……。

あー、ええつ、嘘。まーちゃん？ 私よりも小さかった、笑顔のかわいいまーちゃん!?

*

まーちゃんとは同じ幼稚園だった。

当時の私は幼稚園児にしては背が高く、ほとんどの男の子より頭の位置が上だった。一方のま

ーちゃんはと言うと年長クラスでも一番なんじやないかってくらい小さくて、とにかく目立たない子で、幼稚園児たちの中でもあからさまに隅に追いやられていた。

まーちゃんはいつも身を縮めるようにして歩いていたので、ただでさえ小さい背丈が余計に小さく見えた。他の子に混じって遊ぶことはなく、いつも砂場の隅っこでスコップを片手にお城や山を作ったり、穴を掘ったりしていた。砂場に閉じこもるまーちゃんは、幼くして立派な引きこもりだった。

幼稚園の先生もそんなまーちゃんを心配に思ったのか、なにかとまーちゃんを周囲に馴染ませようと努力していたけれど、まーちゃんはまーちゃんやんで頑なに砂場から離れようとしなない。砂場で城を作り上げるまーちゃんはいつも一人だった。しかしその砂遊びが、結果的に私とまーちゃんの最初の接点を生むことになる。

当時、私はすでにお菓子屋である家の厨房を我が物顔で出入りしていた。出入りしてはいけないと言われていたけれど、そんなルールは幼稚園児にとつてないも同然だ。

私はお父さんがケーキを飾りつけるところを見るのが好きだった。ケーキ作りはお母さんもやるけれど、飾りつけや最後の仕上げをするのはいつもお父さんだった。ケーキのてっぺんを平らにして、クリームをちよんちよんちよんとしぼって、色とりどりのフルーツを宝石のようにちり

ばめる。いちごのショートケーキにチョコレートのブッシュ・ド・ノエル、鮮やかなフルーツタルトにくるりと巻いたロールケーキ。お父さんが作るケーキはどれも色鉛筆で描いたみたいに鮮やかな色をしていて、光を受けてきらきらときらめいている。

ケーキを見慣れていた私は、幼稚園児にしてケーキにはちよつとうるさかった。味はたいしてわからないけれど、見た目に関しては目が肥えている。今思えば嫌な子どもだ。

そんな私がほとんどまーちゃん専用と化していた砂場に突撃したのは、幼稚園年長の夏のことだった。私が勢いよく蹴飛ばしたボールが、たまたま飛びすぎて砂場につつこんだだけのことだったのだが、運悪くそのときまーちゃんが一生懸命作っていたなにかを派手に壊してしまったのだ。

相手がいつも一人ぼっちのまーちゃんとはいえ、さすがにまずいことをしたと思つた私はあわてて謝りにいった。茫然と座りこんでいるまーちゃんにすぐ声をかけようとしたが、彼の目の前に残された砂の残骸がどことなく見覚えのある形状をしていて口をつぐんだ。それがなにであるかに気づき、謝るのも忘れて顔をしかめる。

「それ、ケーキのつもり？」

思いがけずきつい声が出て、まーちゃんは案の定身をすくめた。

「そうだけど……」

「そんなんじゃないだめ。貸して」

私はまーちゃんの手からスコップをひつたくと、壊れかけの砂のケーキに勢いよく砂を盛つた。頭の中にはいつも鮮やかな手つきでケーキを飾り付けるお父さんのイメージがあつた。本物のケーキだつたらそう簡単にはいかないだろうけれど、これは砂のケーキだ。私はすぐに自分が壊してしまった箇所を補修し、砂のクリームを塗りたくり、砂のいちごとホイップクリームを飾り付けた。誰でも見慣れているいちごこのショートケーキ。ホイップクリームのしぼりあとまで爪で再現する私に、まーちゃんは目を丸くしている。

「うち、お菓子屋さんなの」

私は胸を張って言った。

「ケーキとか、タルト作るのよ」

「たるとつてなに？」

「がりがりしたケーキ。作つてあげようか」

私は今度はオレンジ・タルトを砂で作り始めた。こつちはショートケーキよりも難しい。ギザギザとしたタルトの輪郭や、円形に綺麗に並べられたオレンジスライスを再現するのに四苦八苦

する。いまいち不格好ぶかくこうになつてしまった。まーちゃんは砂すなのタルトとショートケーキを見比べ、
ぼかんと口くちを開あける。

「あんた、名前なまえなんて言うの」

私わたしは今いまさらのことを訊きいた。まーちゃんはぼかんと口くちを開あけたまま、思おもい出だすように首くびをかし
げ、答こたえた。

「まさや」

「ふーん。じゃあまーちゃんね」

「……そつちは？」

「私わたしはみなつ」

「じゃあ、みーちゃん？」

「なつちゃん」

「なつちゃん」

納得なっとくしたように繰くり返かえし、まーちゃんはふつと笑わらった。かわいい顔かおで笑わらう男おとこの子こだった。

それ以来いらい、私わたしは砂場すなばでケーキを作つくることにちよつとハマつてしまい、まーちゃんと一いっしょ緒しょに過すご
すことが増ふえた。まーちゃんはケーキに關かんしては不器用ぶきようだったが、ケーキ以外いがいのものならだいた

いなんでも作つくれた。私わたしはひたすらケーキを作つくっていた。部屋へやに戻もどれば粘土ねんどもあつたけれど、粘土ねんど遊びあそびと砂場遊びすなばあそびではスケールが違ちがう。私わたしとまーちゃんは、スケールの大きなものを作つくるのが好すきだったのだ。

——そんなまーちゃん自身のスケールがでかくなることを、想像そうぞうしたことなんて、あるはずもなく。

*

プリントが配くばられるとき、目のやり場ばに困こまる。北岡きたおかは「ん」とごつい手でプリントを差さし出してくるけど、私わたしはその顔かほなんか絶対ぜったいに見みられない。だつてこいつ、あのまーちゃんなんだよ。信しんじられる？　こんなに縦たてに伸のびちやつて！　口下手くちべたなのは相変あいかわらずみただけど、あの頃ころのかわいい笑顔えがおが嘘うそみたい。私わたしが知しっているまーちゃんは女おんなの子こみたいに小ちいさくて、かわいい、弟あとうとこみたいな男おとこの子こだつた。それが今いまや、バスケットボール部ぶに所屬しよぞくするクラス一いちの大男おおおとこ。

普通ふつうになんか、話はなせるわけない。

私わたしは陽菜ひなに相談そうだんした。

「あいつ、幼馴染だったの」

「えー」

陽菜は相変わらずのんびりとした口調であまり驚いてもなさそうなりアクションを取り、それからふにやつと笑った。

「なんか、ドラマみたいな展開だね」

「昼ドラ？」

「ううん、朝ドラ」

確かに。でもそんな甘酸っぱい話じゃあないのだ。

「昔とちつとも違うのよ。もつとチビで情けないやつだったのに」

「育ったんだねえ」

「育ちすぎだつてば」

私はピシヤリと言う。牛乳毎日飲んだつて、あんな勢いで伸びるもんか。

「それで？」

「それで？」

「美夏はどうしたいの」

「どうもこうも……」

私はそんなこと陽菜に相談して、なんて言ってもらいたかったんだろう。ただ聞いてもらいたかっただけ？ 違う。私は……そう。

「どうやってしゃべればいいのかわかんないんだよ」

「普通に話せばいいんじゃない？ おひさーって」

「そういうノリじゃないでしょアレ、どう見ても」

「普段のノリを貫こうとしちゃだめよ。こういうときはね。イキオイ大事」

いやいや、あのまーちゃんモドキにそんな軽いノリで話しかけられるわけないデシヨ。

「普通にいきなよ。いつも通りで。あの北岡くんだよ、って。それが一番美夏らしいよ」

やっとなまなアトバイスをくれたけど、そんなことができれば苦労はしない。っていうか

……。

「あいつ、私のこと覚えてるなら話しかけてくれればいいのに」

「疑ってるんじゃないの。美夏かどうか、わかんなくてさ」

「だったらそんなガン見しなくない？」

「まあねー」

陽菜は他人事のように（まあ実際他人事だけど）のんびりとうなずいた。

陽菜のアドバイスに従って頑張つて普通に話しかけようと思つていたのに、余計な邪魔が入つた。土居が私と北岡が幼馴染だとクラス中に言いふらして回つたのだ。なんでわざわざそんなことするんだろう？ あほでお馬鹿な小学七年生筆頭の土居のやることだから、たいした理由なんてないんだろうけどさ。

「砂場でいつも一緒に遊んでたんだよな。ケーキとか作つて」

私はいらいらを必死でこらえた。北岡は岩みたいな顔を崩さず、なんにも言わなかったが、私の方をチラと見た。なによ、そのチラは。言いたいことがあるんならはっきり言いなさいよ。

「フーフみたいだったよな」

土居が言つて、仲の良い数人のお馬鹿男子と冷やかすように笑つた。なんで男子つてこう、しよーもないことですぐ笑うんだらう。なにがおかしいのさ。中学生にもなつて、そんなことで人をからかつて、カッコイイとも思つてんの。ばつかみたい。

「そんなんじゃないから！ 別に仲良くなかつたし！」

大声で叫んでしまつてから、少し後悔した。北岡は表情を変えなかつたけれど、やつぱりちよ

つと傷ついたかな。まーちゃんだったら泣いたかもしれないなと思う。北岡はやつぱり北岡だ。
なにかと土居の冷やかしが鬱陶しくて、私は北岡に話しかけられなかった。これで話しかけようものなら土居がすつ飛んできてひゅーひゅーと口笛を吹くのが目に浮かぶ。ばかばかしい。そんなの、気にしなきゃいいだけだ。でも気になる。なんでだろう。小学生の頃はきつと気にしなかったな。いや、気にしたか。小学四年生くらいから、男子と女子つて、なんだか対立する。中学生になつてもその頃の流れが続いていて、女子は男子を馬鹿だと思つてるし、男子は女子を馬鹿だと思つてる。お互いに見下しているのだ。だから男子と女子が仲良くしていると、なんだか変な感じがする。目立つし、からかわれる。からかわれない人もいるけど、そんなのクラスの一部の人間だけだ。

とにかく、私は北岡に話しかけられなくて、北岡もたまにこつちをチラチラ見るけど話しかけてはこなくて、なんだかなあ……話したいんだか話したくないんだかわからない。そもそも私、北岡に話しかけたところを話すんだらう。背伸びだね。今何センチ？ え、そんなに？ すごーい……それで終わりそう。北岡は私になにを話したいんだらう。恨みとか、あつたり？ 砂場遊び、本当は一人でやりたかつたのかな。邪魔しちやつたかな。小さい頃の無邪気が、今となつてはちよつと憎い。

うちは小さな洋菓子店だ。メインはケーキ。一番人気はオレンジ・タルト。家がお菓子屋というのは、小さい頃は女の子から羨ましがられたけれど、中学生になるとそんなに誇らしいことでもない。肝心のお菓子は売れ残りだつてあまり口にはさせてもらえないし。

お父さんもお母さんも菓子製造技能士という国家資格を持っている。要するにきちんとしたプロだ。お父さんは製菓衛生師という資格も持っていて、お菓子作りの修業でフランスへ行つたこともあるらしい。お菓子に關しては本當にうるさくて、店の手伝いはさせるくせにお菓子には絶対に触らせてもらえないし、関わらせてもらえない。私がやるのはせいぜい洗い物と、片付けと、店番くらいのものだ。店番といつても、小学生の頃まではお客さんが来たら挨拶をして厨房の両親を呼ぶだけだったし。最近やっとレジ打ちを教えてもらつて、それはちよつとだけ楽しいけど。

店番にはひとついいところがあつて、お店のショーケースを眺め放題だ。最近、ショーケースには柑橘類のお菓子がたくさん並んでいる。黄色、橙色、クリーム色。優しくて、暖かい色合い。お店のショーケースを眺めているだけでふふふと変な笑いが込み上げる。

今日もカウンターの内側にかがみこんでショーケースを眺めてにやにやしていたら、頭上から

「すみません」と声こゑがして私は跳とび上あがった。

「はい！ すみません、いらつしやいま、」

一瞬いつしゆん声を失うつたのは、見覚みおぼえのある大男おおおとこがそこに立たち尽くしていたからだ。

北岡きたおかだった。私は目めを見開みひらいてまじまじと目の前まえの光景こうけいを眺ながめ、それが幻まぼこでないことに氣きがつくとはつと我われに返かえる。

「せ」

と言いつて、とつさに無表情むひょうじやうを取りつくりつた。本ほん当とうは笑顔えがおを作つくらなきやいけない。接客せつきゃくなんだから。でも無理むり。笑わらうとか、無理むり。超無理ちやうむり。でも、接客用せつきゃくようの笑顔えがおは出でてこないくせに、今こん度はなんだかおかしくなつて笑わらいそうになつた。だつて北岡きたおか、お菓子屋かしやが似合にあわないんだもの。つていうかなんでここに？ と思おもつたけど、そういえば家近いえちかいんだつけ。もしかしたら小學生しょうがくせいの間あひだもお店みせにきたことあつたのかな。

北岡きたおかは北岡きたおかで、なにかを言いいたそうで、ずいぶん長ながいこと言葉ことばを探さがしているようだった。つていうかこいつ、店番みせばんしてるのが天海美夏あまみなだつてわかつてんのかな。わかつてて来きたのかな。まーちゃん、と呼よんでみようかどうか考かんがえていると、

「ケーキが欲ほしいんだけど」

北岡きたおかがようやくくしゃべった。低い声ひくいこえ。知らない声しらないこえ。どことなく照れた顔あはれたかほだった。なんだ、ちゃんと表情ひょうじょうあるじゃない。面影おもかげもちよつとある……ような気がする。
「お誕生日たんじうびかなにかですか？」



あくまで知らんぷりすることにして丁寧ていねいに訊たずねると、北岡きたおかはなぜかほつとしたような顔かおになつた。

「いや、お見舞みまい」

「お見舞みまい？」

ついつい素すが出てしまひ、あわてて「お見舞みまいですか？」と言いい直なおす。誰だれのお見舞みまいだろう。それくらいは訊きいてもいいかな。

「どなたのお見舞みまいですか？」

「じいちゃん」

「どうかされたんですか？」

「ただの捻挫ねんざ。でも歳としだから」

北岡きたおかはぼつぼつと言ことばを区切くぎるようにしてしやべる。口下くちべ手たなところは昔むかしと変かわつていないらしい。大きな病びょう気きとかじやないならケーキも食たべられるだろうけど。

「えつと……お年寄としよりのお見舞みまいだったら、ケーキより和菓わがし子ことかの方ほうが喜よろこばれるんじゃないで
すか」

北岡きたおかは頭かぶを振ふつた。

「じいちゃん、ケーキ好きなんだ」

「へー。変わったますね」

「そうかな。俺もケーキ好きだぞ」

大真面目な顔で言われ、また笑いそうになる。だから、似合わなすぎだつてば。まーちゃんな

らともかく、北岡がいちごのショートケーキを食べてるのはなんというか……変。うん、変。

「どんなケーキが好きとかありますか？」

「ソー、なんでも食べる人だから……」

「フルーツは好きですか？」

「果物は好きだと思おう」

「クリーム苦手とかありますか？」

「甘いものは好きだから、大丈夫だと思おうけど」

「さっぱりしたものが好きとか、こつてりしたものが好きとか」

「ああ、それはさっぱりかなあ……酢の物とか好きだし」

「病室で食べるんですよね、きつと」

「ウン」

「えつと……一応訊きますけどカットケーキで大丈夫ですよ。うちはホールは予約必要なんですけど」

「大丈夫。小さいやつで」

「わかりました。じゃああとは種類ですね」

勧めめる側としては選択肢が多くて悩ましいところだった。

「たぶん、クリーム使ったケーキより、タルトとかパイの方が好みかなと思うので。フルーツもたくさん使ってるのが多いし、甘いけどさっぱりめで食べやすいと思います」

北岡はふーんと言って私がこの辺、と指差したあたりのケーキをじっくり見始めた。背が高いのでショーケースに対してかなりかがみこむ感じになっていて、つんつんとした短い髪型のでつぺんが見えている。こうして見ると高校生っぽい。ケーキを見る顔は真剣だ。部活のときもこんな顔してるのかな。

それにしても——いい加減、じれったい。

知らないフリしない方がよかつたかな。北岡は絶対私だつて気づいてるよね。気づいてるのにあえて知らないフリをしているんだよね。本当にただケーキを探して、たまたま近所のお菓子屋に行ったら私がいただけ気づいてないとか……ないでしょ。学校で前後の席で、一度ぼつちり

目も合つて、幼馴染で、ケーキには少なからず因縁もあるのに。つていうかフツーにタメ語だし。

なんで話しかけてこないのかな。そりや、私だつて話しかけないけどさ。気まずい？ まあ気まずいね。恥ずかしい？ 照れはあるか。実は私が嫌いとか？ あるかもしれないけど、だってそんなにじろじろ見ないと思うしなあ……。

「そう言えばオレンジ・タルトがおすすめなんだっけ？」

急に北岡がそう言ったので、私はきよんとした。

「なんで知ってるの？」

素が出てしまった。北岡は気づいたのか気づかなかったのか、ショーケースから顔を上げずにオレンジ・タルトを見ている。

「前にも来たことあるから。でもじいちゃんオレンジよりはぶどうかな……」

そう言つて、今度は顔を上げた。

目が合った。

ばちばちつと。火花が散った気がして私はぼつと目をそらす。なんだ今の。なんか火花散つた。ケンカとかじゃない。そういう物騒なやつじゃなくてなんかこう……。

よくわからないでいるうちに、北岡が「このぶどうのタルトをふたつください」と言った。「ふたつ……ですか？」

かろうじて接客スタンスに戻った。なんでふたつなんだろう。

「俺も食べたくなった」

北岡はマイペースにそう言つてのけ、後は私が包むのを待つかのようにポケットに両手をつっこみ、きよろきよろと店内を見回し始めた。

北岡はふたつのタルトを包んだ箱をぶら下げて店を出ていった。最後まで私が「なつちゃん」であることには触れず、私も北岡が「まーちゃん」であることには触れなかった。

*

そう言えば、まーちゃんにケーキをプレゼントされたことがある。

幼稚園の頃。私の誕生日がある、五月のこと。

もちろん、本物じゃない。土でできた、作り物のケーキだ。

たぶん力作だった。

砂ではなくわざわざ園内の日陰の赤土を掘って作ったのは、その方が固まって形が崩れないと思つたのだろう。形は三角形をしていて、カットケーキをイメージしたのだと思う。フルーツ代わりのとがった石ころと、雑草の茎で飾りつけされていて、上から砂場の白っぽい砂をかけてるのはアイシングのつもりだったのかもしれない。

まーちゃんはそれを、紙のお皿にのせて私の机にぼんと置いた。そして唐突にズレたメロディでハッピーバースデートウユーと歌い始めた。

みんなぼかんとしたのは言うまでもない。

それから私の机の上の土のケーキを見て笑い始めた。悪気があつたかと言えば、あつたのかもしれない。まーちゃんは変な子だと思われていただろうし、どちらかと言えば馬鹿にされていた。そんなまーちゃんが突然私の席に土のケーキを持ってきて、バースデーソングを歌い始めた。誰だつておかしいに決まっている。

私は私自身が馬鹿にされたように感じて、顔が熱くなった。歌い続けるまーちゃんに早く黙れと思つた。ちつとも嬉しくなかつた。土のケーキはよくできていたし、まーちゃんがそれを一生懸命作ってくれたであろうことも、悪気なんかこれっぽっちもないであろうこともわかつてい

て、それでも怒りが勝った。

結局私はまーちゃんが歌い終わるまで我慢できなかった。

ぱんつと立ち上がり、机の上のつたケーキを皿ごとひっくり返してまーちゃんの足下に叩きつけた。

「砂のケーキじゃ食べられないじゃない！」

ほとんど泣き叫ぶように怒鳴ると、まーちゃんはぼかんとして口をつぐみ、笑っていた声はざわざわとしたざわめきに変わって――。

まーちゃんは泣かなかつた。でも確かに、その顔には傷ついたような色があつた。思えばそれ以来、私はまーちゃんと砂場で遊ぶことがなくなつたのだ。

*

朝、学校へ行くと、北岡は相変わらずのむっすり顔を張り付けて席に座っている。私には気づいたはずだけどツーンと澄まして見向きもしない。おはよう、と挨拶をしてやろうかと思つたけど土居がいたのでやめておいた。タルトの感想を聞きたかつたけど、私から訊いたら負けな気が

するね。

後ろの席に座りながら、結局あれはなんだったんだろうと思う。私たち、話せたってことでいいの？ あんなに他人行儀だったの？ 学校でもまるで互いのことを知らんぷりして、視線も交わさなくて、土居にからかわれてもツーンとしてそうじゃないよ、と否定して……でもたぶん、お互いにお互いが誰だか本当はわかってる。

お店で話したとき、私たちは昔のまーちゃんとなつちちゃんに戻ったんだろうか。そんなわけないか。あれは店員とお客さんの会話だ。でもあんな会話でも土居に聞かれたらと思うと——ぞつとするね、まったく。ぎゃあぎゃああと夕暮れ時のカラスみたいにわめくんだらうね。リアルに想像できるわ。

まあしかし、あんなでも北岡としゃべったんだよなあ……夢だったんじゃないかって、疑ってしまうよ。学校じゃちつともしゃべんないんだもん。授業中の発言数の方がまだ多いくらい。部活だと声出しとかあるだろうから声出すのかな。運動部だしね。きつとあるよね。別に聞いてみたいなんて思わないけどさ。

ああ、なんか北岡のことばかり考えてしまう。嫌だな、こういうの。まるで好きみたいでさ。興味ないよ、全然。……いや、全然ってことはないけど。

どうしたいんだらうな、私。北岡とどう話せばいいのかわからなくて陽菜に相談したときは、とりあえず話さなきゃいけない気がしてたんだ。幼馴染だし、いろいろ話してみたいなって思っ
て。でも実際には……お互いにお互いを、あの頃の幼馴染だと認めることもできない。気ま
さ？ 恥ずかしさ？ いろいろあるけど、たぶん全部。

別に仲良くしたいわけじゃない。北岡なんてどうだっていい。昔とは違うんだ。でもなんか
……気になってしまう。

気になる、つて変な感情。

学校じゃ背中しか見てないのに。その背中をついつい見ってしまう。見続けてしまう。その背中
が振り向くことを期待してるみたいに。北岡が私の背中を見ていたみたいに。だってさ、だつ
てさ、これまーちゃんの背中なんだよ。今でも信じられない。

陸上部に入ることにした。やっぱり今の私には走ることが必要だ。全部後ろにかつ飛ばして、
風になる瞬間が。

「美夏は入ると思つてたよー」

と陽菜にはのんびり歓迎され、

「バスケット部のマネージャーはいいの？」

と土居にはからかわれる。だーかーらー、おまえはっ。ちよつと黙つてろ。ばか。あほ。あんぼんたんっ。

陸上競技つていうのはいろいろ種目があるけれど、私は基本走ったり飛んだり跳ねたりが好きなので、小学生の頃はハードルをやっていた。得意つてわけじゃないけど、早くも遅くもないし。トラック競技の花形はやつぱり100メートルとか、リレーとかだと思うけど、ハードルもなかなかイケてると思うね。個人的にね。綺麗に跳べる人は本当にかっこいいんだ。頭の位置がまったく変わらなくて、跳ぶつていうかまたぐんだけど、本当に無駄がない感じ。うまい人のハードル走はリズムがよくて、見る方も気持ちいい。

自分もそういうふうに住れたらいい。見てる人が気持ちいいと思えるくらい、爽快に住れたら、きっと走つてる本人はもつと気持ちいい。まあでも、中学では違うことにチャレンジするのもいいかな、と思つてとりあえず長距離を志望してみた。走ることに特化するのも、悪くない。

「そう言えば美夏、岩男と話せたの？」

部活の合間に陽菜に訊かれた。

「うーん、話せたのかなあ」

「なにそれ。どっちなのよ」

「いや、話したんだけど……夢だったのかって感じ」

お客と店員だったしね。

「おいおい」

ほんと「おいおい」だよ。別に夢でもいいんだけど。問題はそこじゃあないのよ。

陽菜には週末のことは言わなかったけど、北岡が思った通り口下手なこと、言葉は区切るみたいにしてしゃべること、あの無表情にどんなふうにも感情が乗るのか、どんなふうにしてしゃべることか、どんな性格なのかを話して——それを二人で勝手に批評するのはちょっと楽しかった。

「まあ、話せたんならよかつたじゃん」

陽菜は私と北岡の会話をそんなふうに評した。

「とりあえずはそれでいいんでないの。幼馴染だから仲良くしなきゃいけないってわけでもないだろうしさ。たまに気が向いたときにでも話してみれば」

陽菜の言うことはもつともで、私もそれがいいかなと思う。

昔とは違うのだ。昔みたいに砂場遊びをする歳でもない。今はもうまいちゃんとなつちちゃんじゃないのだ。やっぱり違うと思う。

「でもあいつ、私のことちゃん覚えてたんだよなあ……」

しみじみつぶやくと、陽菜がふにやつとした顔になった。

「やつば好きなんじゃないの？ ヒトメボレ説はなくなつたけど」

きやろまんちつく、と土居みたいな笑い声をあげて、陽菜は逃げ出した。追いかけてこらしめてやろうかと思つたけど、私より陽菜の方が足が速いので諦めた。

*

北岡が二度目に店を訪れたのはゴールドデンウィークのことだった。

店番をしているとのつそりとした影が店先に差し、誰かと思つたら岩男だった。

「いらつしやいませー」

私が声をかけると北岡は他に客のいない店内に入ってきて、ショーケースの前で立ち止まる。

そうやってまつすぐ立っている、本当に見上げないと北岡の顔が見えない。

「こんにちは」

「……ども」

挨拶も素っ気ない北岡は私の顔を見て、なにか言いたそうにする。

「……タルトおいしかったですか？」

と私の方から水を向けてやると、北岡は一瞬目を丸くした後、照れたように浅くうなずいた。「じいちゃんも、うまかったって」

私はほっとする。お父さんとお母さんの作るケーキがまずいわけはないんだけど、自分も売ったものにはやっぱり責任を感じてしまうから。

「今日もケーキですか？」と訊ねると、北岡はうなずいた。

「ごゆっくりご覧ください」とだけ言って放置してみる。

しばらくカウンターの内側で包装用の箱を折ったりしていると、北岡はショーケースを見るフリをしたり、考えるフリをしたり、悩むフリをしたりしていた。でもどれも「フリ」だとわかってしまうあたり本当に不器用だ。どうやらまた私に選ぶのを手伝ってほしいようだけど、どうしようかな。微妙に意地悪をしたくなるのは性格が悪いかしら。

「なにかお悩みですか？」

しばらくしてから助け舟を出すと、北岡はあからさまにほっとした顔をした。

「ケーキを選んでほしい」

「どんなケーキをお探しですか」

「どんな……」

「またお見舞いですか？」

「いや、誕生日」

「お誕生日ですか。おじいさんの？」

「もつと全然若い。中学生」

「なるほど……ちなみに女の子？」

これはつい魔が差した。

別に真面目に答える必要なんかないのに、北岡は目を見開いて、それからそつぽを向きながら「ウン」と言った。

なぜかどきりとした。なんでどきりとするんだらう。

「……わかりました。そしたらやつぱりショートケーキとかですかね」

私はいちごのショートケーキを指差した。

でも北岡はまだこつちを見ていて、

「おまえ、店のケーキでどれが一番好きなの？」

いきなり、そんなことを訊いた。

おまえ、つて。

一気に私の温度が下がったのに気がついたのか、あわてたように北岡が言い直した。

「君は、どれが好き？」

言い直されたところでカチーンときていたので、適当に答えてやろうかとも思うが、ケーキのこととなるとそういうわけにもいかななくて。

「えーと……やっぱりオレンジ・タルトですかね。オレンジ好きだし、タルトも好きだし。色があつたかくて、優しくて、味も甘酸っぱくて好きです」

「じゃあそれひとつください」

私は拍子抜けした。

え、それでいいの？ 私チヨイス？ 誰だか知らないけど女の子にあげるんじゃないの？ 動きを止めてしまった私を見て、北岡の方が首をかしげる。

「なに？」

「いえ……ありがとうございます。おひとつですか？」

「はい」

今回は一緒に食べるわけではないらしい。

私はショーケースの扉を開けて、オレンジ・タルトを一切れ取り出し、一番小さいサイズの箱に詰めて、隙間を厚紙をくるりと丸めたスペーサーで埋めた。手早く賞味期限のシールを貼って蓋をして、レジを叩きながら訊く。

「ドライアイスつけますか？」

北岡は首を横に振る。

「五百四十円です」

突きだされた千円札を受け取って、千円を入力。レジスターが開く。

「四百六十円お返しです」

お釣りとレシートを渡してから、梱包したケーキの箱をビニールの手提げ袋に入れて、カウンターに置いた。北岡はそれに手を伸ばし——なぜか私の方に押しやった。

「ん、やる」

なにを言っているのかわからなかった。

「え？」

真顔で訊き返すと、北岡の顔はうつすら赤かった。

「これ、おまえにやる」

また「おまえ」と呼ばれてしまったが、今度はそれどころではなかった。私にくれる、と言ったの？　なんで？

「誕生日近いだろ」

なにが気まずいのか、北岡は早口にまくし立てる。

「今度はちゃんと食べられるケーキだから」

私ははつとした。

——砂のケーキじゃ食べられないじゃない！

昔、そう言つてまーちゃんの作つた土のケーキを床にぶちまけたことがあつた。何年も昔。まだ私がまーちゃんよりも大きかつた頃の話。

——今度はちゃんと食べられるケーキだから。

それは明らかにあの日のことを指して言つていた。

今、北岡は初めて私のことを「なつちゃん」だと認めたのだ。

あのとき、ひどいことを言つた私の誕生日を、北岡はきちんと覚えていたのだ。覚えていて、今日それを祝つてくれようとしたんだ。

「じゃあな」

お店を出ていこうとする北岡の背中に、声をかけずにはいられなかった。

「待って……まーちゃん」

北岡が立ち止まる。

振り返った顔は——笑っていた。あの頃の面影を残した、どこか幼い笑み。それは成長した無愛想な顔に、けれど不思議とよく似合っていた。見ているこっちがくすぐったくなるような、かわいい照れ笑い。

「まーちゃんはやめろよ」

北岡はそう言っ、頭をかきながらつぶやくように呼ぶ。「なっちゃん」と。

ふわふわと、奇妙な気持ちだった。

まーちゃんがいる。背が高くて、愛想が悪く



て、あまり笑わなくなつたまーちゃん。あの頃よりもきつと強くなつて、泣かなくなつて、なんでも自分でできるよになつたまーちゃん。だけどあの頃と変わらず誕生日にはケーキをプレゼントしてくれるまーちゃん。

「……ありがとう」

私はやつとのことでそれだけしぼり出した。

言いたいことは他にもたくさんあつたはずなのに、それを言うのがやつとだつた。北岡はニヤツと似合わない顔で笑つて、じゃあなと手を振つた。手を振り返す余裕は、ちよつとない。

日中は日が照つていたが、夜は涼しい。部屋の窓を開けるとふんわりとした風が優しく肌をなでていく。気持ちのいい夜だ。

夕ご飯を食べたのは一時間前だつた。お腹はまだいっぱい。そんなに食べる方でもないし、甘いものは別腹なんて言えるほど甘党でもない。それでも……。

私は寝転がっていたベッドから起き上がると、冷蔵庫から持ってきたケーキの箱をそつと開く。

お店で見慣れているはずのオレンジ・タルト。ふわつと甘い香りが立ち昇つて、蛍光灯の光を

受けたオレンジがきらきらと輝く。実はそんなに食べたことない。残り物でも口にはさせてもらえないし、お小遣いで買うには決して安くはない。

なぜか息を詰めてしまう。謎の決意を以てフォークを手に取ると、三角形の先端を少しだけ切つてフォークに刺す。

照れたように笑う北岡の顔がなぜかまぶたの裏に焼き

ついて消えていかない。なんだよなんだよ、すがすがしい顔で笑ってくれちゃって。してやったりとでも思ってるんだろうか。まーちゃんのくせに。そう思うとなんだか悔しくなってくる。

私はえいやつとフォークを口に運んだ。

舌に乗った瞬間広がる、甘酸っぱいオレンジの風味。寸前までの悔しきなんて吹き飛んでしまうような優しい甘さ。思わず足がばたついた。これ、こんなにおいしかったっけ……。

甘くて、酸っぱくて、ほろ苦い。鮮やかなオレンジからは、爽やかに夏のおいがする。少しだけ北岡の顔を思い出しながら、私はゆつくりと二口目を口に含む。

